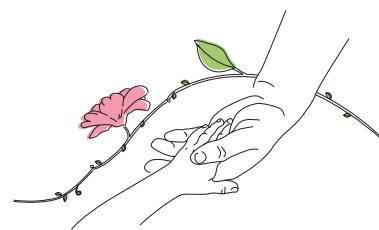


支える人、寄り添う人

高橋 健介

Kensuke Takahashi

長崎大学病院
高度救命救急センター
救急・国際医療支援室
(長崎みなとメディカルセンター
救命救急センター勤務)



海外医療支援の経験を 国内の救急診療、医学教育に生かす

マラリアに罹患した栄養失調の子供、切迫早産の妊婦、喧嘩して斧で頭にばっくり開いた傷口。2014年、「総合内科医」として赴いたエチオピアの難民キャンプでは内科のみならず様々な疾患に対応しなければならず、毎日が戦場だった。それまで感染症を得意とする内科医として働いてきた私は、救急医療の必要性を改めて痛感した。

世界にはまだまだ医療格差が存在し、紛争や貧困、気候変動に伴う飢饉などで苦しんでいる人がたくさんいる。

私は途上国での医療に興味があつて、医師を志した。医師になってから、国内における地域や専門分野による医療格差にも気づき、国内で医療をしながら海外にも行きたいという想いが強くなった。医師4年目で熱帯医学研究所のある長崎に来て、海外研究拠点での勤務や国際NGOへの参加など多くの経験を積むことができた。

2020年、長崎地域の地域救急医療体制の強化を目的に、長崎大学病院高度救命救急センター内に「救急・国際医療支援室」が発足し、大学からの派遣という形で早川教授のもとで長崎みなとメディカルセンター内に救

命救急センターが立ち上がった。

「国際」という名称が冠された経緯は、国際水準の医療を提供する救命救急センターであると同時に、日本の医師が気軽に国際貢献できる環境を作ることと目的の一つである。勤務がシフト制であることとスタッフの理解と協力により、1年のうち3ヶ月程度、研究や医療支援に出かけられるというシステムが実現した。私自身がその最初のケースとしてフィリピンマニラの研究拠点病院に診療応援と研究支援の目的で派遣され、貴重な症例を経験することができた。

医療資源が乏しい地域での臨床では幅広い知識が必要となり、問診や身体所見の取り方が洗練される。こうした経験を医学生や若い医師の教育に生かしつつ、国境を問わず患者や家族が満足のできる医療を提供したいという想いで日々の診療に取り組んでいる。



▲マラリアに罹患した栄養失調の患児を診察する(2014年、エチオピア)
©Aurelie Baume/MSF